

(肝属郡田代町岩崎)

位置と環境

遺跡は大隅半島の略中心、大根占海岸より10km、標高240m、雄川の支流、麓川が作った盆地の中にある。この地塊は肝属平野によって孤立し、地質も主として花崗岩よりなる特殊な地域で、平地が少ない。

麓川に沿って、岩崎集落があり、その北東の天神を祭つた社の裏（北）の傾斜地（傾斜角10°）が遺跡地である。

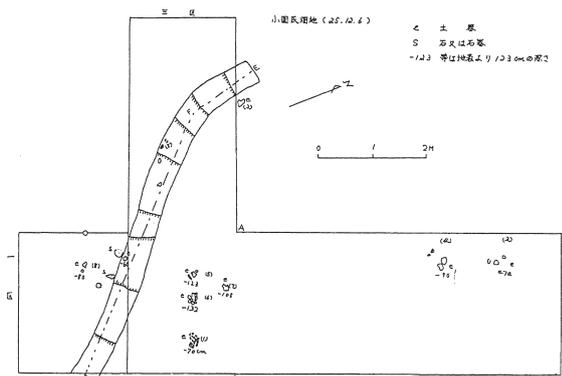
昭和25年12月5日より同月9日まで、発掘調査を行った。

遺構と遺物

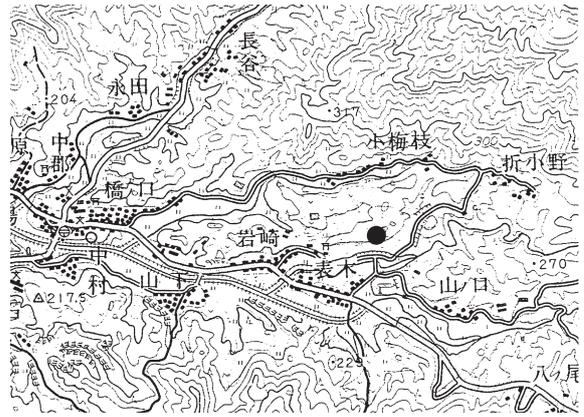
地層は、表土20～30cm、黒褐色腐植土、第2層黄色砂礫層・花崗岩の風化した層で、深部に及び下限は極めることができない。遺物はこの層の上部約1m余りの厚さに包含されている。

構築された階段状道路

遺跡を北西→南東に通ずるS字状道路が構築されている。地形は北西に高く南東に低く、地表の傾斜は13°であるが、遺跡面では傾斜が急で、構築された道路面では18°となっており、40～50cm幅の道路に、50cm乃至1m毎に、20cm乃至10cmの段を設けて滑り止めを行うという、縄文草創期の踏み分け道に比べて格段の進歩である。道の表面には石斧や土器が残されていて、通行が頻繁であった事を示している。



第2図 岩崎遺跡発掘図



第1図 岩崎遺跡の位置

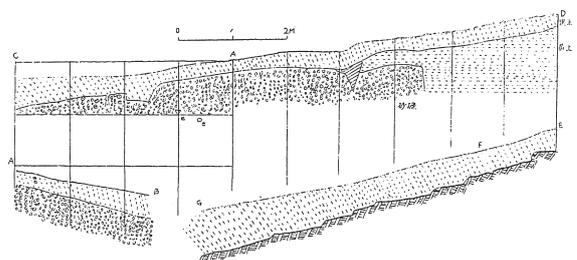
岩崎下層式土器

岩崎遺跡の第2層の上部1mが遺物包含層である。出土する土器は同一系統の土器であるが、上下層出土によって相違が見られるので、下層出土の土器を、岩崎下層式とし、上層から出土する土器を岩崎上層式とした。

岩崎下層式土器（第4図1）は、深鉢形平底の器形で、口縁部に波状の切り込みを有し、口縁部に把手状の凸起を有するものもある。器面は黝黒色を呈し、内外ともに、貝殻腹縁で調整している。胎土は粒子が粗く、雲母を含む。文様は口縁部の下に指頭で描いた凹線文を、一列または二列巡らし、その下に更に凹曲線を2～3条巡らすものである。阿高式に類似しているが、貝殻条痕を有し、大隅半島を主分布地域としている。

岩崎上層式土器（第4図2）

遺物包含層の上部から出土する土器である。器形は深鉢形で、頸部がやや締まり、胴部の少し張った平底の土器である。口縁部が平坦なものと、波状の切り込みのあるものがある。文様は口縁部直下に、貝殻腹縁による刺突文を巡らすものと、それのない



第3図 岩崎遺跡地層図

ものがある。口縁下に複数の凹曲線を巡らす点は共通している。器面調整に、内外面共に貝殻腹縁を使用する点は、下層式と同様であるが、胎土に雲母を含まない点では、下層式との差異が見られる。

磨消縄文土器

第5図6・7・15、の土器である。口縁部が外反し、胴部のやや張ったもの・口縁上面に波状の刻みを付したもの・口縁上面に凹線を縦に施文したものがあ。上層土器の土器と同様の凹曲線文の間に、磨消縄文を施した土器である。この磨消縄文土器は上層の土器と共伴関係にあるものと思われる。

石器

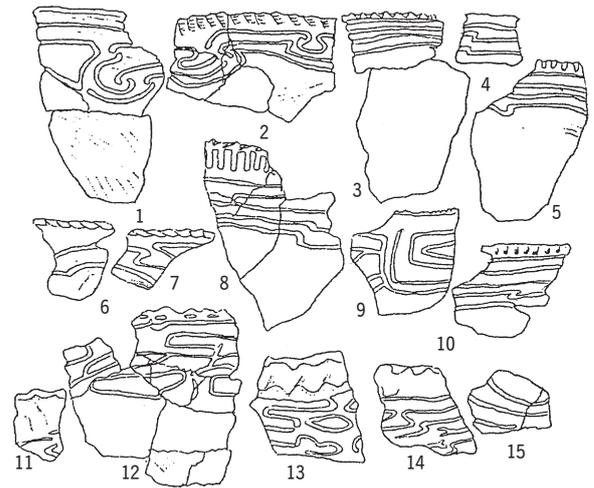
上層からは、小形石斧を出土し、下層からは花崗岩製の石皿が出土した。

土器の比較

岩崎下層式土器は、深鉢形土器であって、口縁部に波状の刻みのあるのが特徴で、把手状の凸起のあるものも見られる。頸部はやや縮まっているが、胴部より張ることはない。

岩崎上層式は、口縁部の刻みが失われ、その痕跡として、口縁部外側の稜線に刻みの跡を残すものがある。頸部が縮まって胴部に至り、やや外側へ張り出し気味のものが見えてくる。

指宿式土器と岩崎上層式土器とを比較すると、よく似ているが、指宿式には山形の隆起した口縁や、直口で胴部の張った甕形の器形が表れる点に差異が見られ、一つの流れの中の文化であろうと思われる。岩崎下層式土器には、頸部に指頭圧痕様の押圧文の並列が見られるが、岩崎上層式では失われ、曲線文だけになり、しかも簡単な平行曲線文となった。



第5図 岩崎遺跡の土器

1～5、8～10 岩崎上層土器、
6・7・15 磨消縄文土器
11～14 岩崎下層式土器

指宿式の文様は、二平行曲線文および直線文であるが、岩崎上層式に一致するところがあり、両者の関連を示すものとなっている。

岩崎下層式・岩崎上層式・指宿式の三型式はいずれも貝殻腹縁による器面調整を行うという共通点がある。

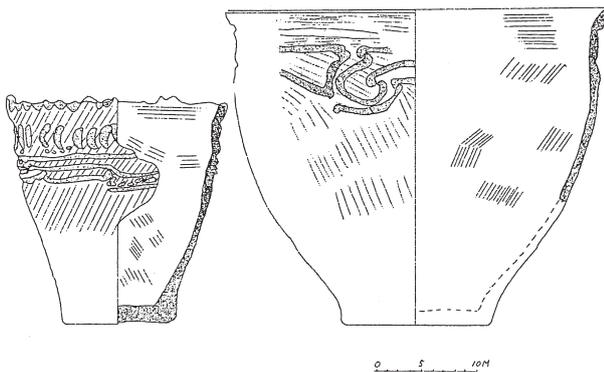
資料の所在

出土遺物は、河口貞徳宅に保管されている。

参考文献

河口貞徳1953「南九州における縄文文化の研究」
『鹿児島県考古学会紀要』第3号

(河口貞徳)



第4図 1・岩崎下層式土器、2・岩崎上層式土器